戀人たちの森
一九六一年九月二六日印刷
一九六一年九月三〇日發行
著者森 茉莉
發行者佐藤亮一
發行所株式會社新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四一局七一一一
振替東京八〇八
塚田印刷、神田加藤製本
定價二九〇圓

© 1961 Mari Mori
乱丁本はお取替へします。

目次

ボッチチェリの扉　5

戀人たちの森　101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

森茉莉創作集

ボッチチェリの扉

由里(ユリア)が田窪といふ家の二階の六疊の、もと田窪信吉といふ、たしかに幸福ではなかつたに違ひない男の寢臺(ベッド)のあつた跡の場所に、自分の寢臺を置いて、そこに起居してゐたのは既に十年近い昔になる。田窪信吉といふのは、その頃既に死んでゐた人間で、その家の主人である。東大の湖沼學(こせう)といふ、變つた科目の教授だつたといふことで、あつた。どういふ譯か、多分夫人と不和だつたのだらうが、その男の肖像寫眞(ポルトレ)は、家族のゐる部屋には置かれてゐなくて、由里の部屋の壁の、由里の寢臺を見下ろす位置に、掛かつてゐた。由里がその家の中にあるものを少しづつ見るやうになつて來るのに從つて、由里はその肖像の男が、その家族たちに對して自分と同じ考へを持つてゐたのではないかと思ふやうになり、

肖像が自分に物を言ふやうな氣分のすることもあるやうに、なつた。肖像の男は、英吉利人のやうな美貌の老人で、眼が大きく、眉が狹まつた、激しいものを潛めてゐる顏を、してゐた。昭和二十三年から五年にかけて、由里はその家にゐたが、その間に見たといふよりも、味ははされた、といつた方が當つてゐる田窪家の狀態といふものは、全く憂鬱なものだつたし、又由里はそこで、ひどく胸のいたむことにも出會つたので、あつた。

大きな家である。荒れた叢園の中に、建物全體が蒼朧として建つてゐる、といふ印象のある家で、下宿する人間が由里でなかつたら、その家を見ただけで引返したかも知れなかつたが、由里といふ人間はものが變つてゐるといふことには、全く不感性で、あつた。家の中には、まるでその家の主のやうな老女が、灰色のきものを幾重にも纏ひつけた感じでふはふはと、漂つてゐた。細い眉の下に腫れ眼蓋に見開いた細い眼と、寸詰りな薄い鼻、鼻の下の短い薄い脣に、面妖な色氣のある、銀髮の醜い老女である。この家の中では、未亡人であるこの繪美矢といふ名の女の氣分がすべてを支配してゐるのは當然だが、それにしても庭の隅々や壞れた門の內側、植込み、敷石の周圍、なぞに雜草が蓬々してゐる家の外廓と、古風な家具のある暗い家の中全體にある氣分、それと繪美矢との關係は酷く密接

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

であつて、繪美矢の氣分がこの家を造り出してゐたのに係らず、先にこの家があつて、その中から繪美矢夫人が湧いて來たやうにも、見える。二階へ上る階段が軋んで鳴る音がしてゐる。木目が黑く浮き上つて、低いところは白つぽくけばだつてゐる廊下は、人が歩くたびにみしみし言つたりしてゐる。その中に繪美矢といふ灰色のふはふはとした物體が漂ひ、その灰色のものの頂點から、針金の管を通つて出るやうな細くびんびん響く金切り聲の口小言が、絶え間なしに發してゐるのである。このまるで建物と人とが交互に相手を腐らせ合つてゐるやうな狀態は、大分前から續いてゐたもののやうで、あつた。田窪信吉は由里がその家に入る七年前に、死んだ。田窪信吉の死と敗戰と、體面ばかりを頭においてゐる繪美矢夫人のふんぎりのつかなさ。それはこの家の狀態の表面の理由である。眞實の理由は、繪美矢の內面にある、どうも出來ない、困つたもの、であつた。大學教授と言つてもかなりの資產のあつた家だつたらしいことは直ぐにわかるし、又、繪美矢の頭に去來してゐる過去の夢が、さうさせることもあるのだらうが、この大きな家の中にゐると、黑光りのする板壁の隅や、扉簞笥の蔭のあたりに、賑やかだつた昔のこの家の物音が、幽かなオルゴオルの音のやうに、鳴つてゐるやうな氣がすることが、あつた。臺所口から入つて行くや

うな時、由里はふと立止つて煤けた廣い臺所を覗き、どういふわけか、耳を澄ませた。現在では道具屋にしかないやうなどつしりと重いサイドボオドと茶簞笥、瑕と何かの浸みで一杯の油光りのした調理臺。茶の間に行く通路にある冷藏庫が、これも黑く古びて、金具は錆が出てゐる。板の間も黑く光つてゐて、その中を眼に見えない風が吹きぬけてゐる。赤錆びになつた瓦斯臺には、缺けた洋皿に竹輪と、なにかの經木包みが載り、眞中が窪み、角の丸くなつた滿身創痍の俎の上には、挽肉かと思ふやうに刻み叩いてねつとりとした古漬けが、その窪みを埋めて小高く、蛞蝓の形に靜止してゐる。色の褪めた標準服の上着を着膨れた上に着た繪美矢が、頑丈な皺のある腕を延ばして、サイドボオドから茶器を取り出してゐる。その夫人の厚い肩の邊りに、不滿のやうな、怒りのやうなものが滲み出してゐるのを見ると、由里の耳に聽える過去の音のざわめきが、一際大きく、聽えて來た。騷々とした來客の氣配である。疊や板の間を擦る女中達の足音、湯の沸く音、ものの煮える音、頰を紅くした女中が、頭を首に埋めたやうな後姿で何かを刻んでゐる早間な音、男客の陽氣な笑ひ聲。その間を縫つて、夫人の細い透つた、ヒステリックな聲が何かを命じ、華やかに笑ひ、幼い二女の麻矢の彈くピアノの音が、ポツン、ポツンと歌の節を形づくつて行く

のである。さうしてそれらの物音に伴れて、暗い臺所も繪美矢夫人も、微かに搖れ出してくるやうにも、思はれた。繪美矢夫人は用があるといふのでもなく、この家の中を漂つてゐたが、この家の中をあてもなく彷徨つてゐるやうな氣配で歩いてゐるものは、まだ他にもあつた。それは二男の沼二といふ男と、カメといふ毛の長い黑猫である。沼二は異常なほど神經の鋭い、誰とも口を利かない青年である。互ひに避けてゐるらしく、この沼二と繪美矢とは出會すことがなく、別の所を歩いてゐた。全身の毛が長く、殊に後首の部分が化けもの染みて長い、眞黑なカメは、夫人の後からふはふはと飛ぶやうに階段を上つたり、沼二や誰彼の後に從いたりして、漂ひ廻つてゐた。

そんなやうな家にいつの間にか住みついた由里は、憂鬱な風景に包まれながらもそこから出て行かうとは、しなかつた。由里といふ人間には一度何處かへ腰が据わると、そこから容易に動けない習性のやうなものがあつた。部屋の中ででも、他人の家ででもさうで、まして動くのに煩瑣な雜事と費用が要る引越しとなると、動くよりは死んだ方がましな位のものである。ふらふらと出歩く由里は、日に何度となく田窪家の玄關を出たり入つたりしてゐたが、その玄關には由里が、後になつて田窪家といふものを頭に想ひ浮べる時、忽

ち眼の前に出てくる印象の強いものが、あつた。それは玄關の正面にある扉の上に張りつけてあつた、ボッチチェリの「春」の女神の、胸までの畫である。その畫は由里(ユリア)が入口を入らない前から、硝子戸越しに朧(ぼんや)りと、見えてゐて、その畫を見る度に由里の頭に、沼二といふものの存在が、なんとなく頭に引つかかつて來たもので、あつた。それは由里が、沼二といふ青年の毎日といふものを幾らか知つてゐて、そのボッチチェリの畫といふものが、沼二の生活の、ほんの少しの自由な時間の中で、そこに張りつけたものだといふことを知つてゐたからである。沼二が玄關の左脇の居間から護謨糊を右手に、畫らしい厚紙を、左の脇にごわごわさせて出て來た時、偶然通りかかつて見たのだが、由里は瞬間ぎよつとしたのである。今にも後の臺所からか、或は又扉の後の茶の間からか、繪美矢(エミヤ)の細く透つたヒステリイ聲が襲ひ掛かつて來はしないかといふ恐怖で、ぎよつとなつたのである。沼二が何か自由な行動を——その多くは奇妙なことであつたが——とるのは、母親の留守の間で、しかも家族の誰もが見てゐない時といふ、よく見定められ、狙ひをつけられた時間である。それを驚きの爲につい忘れたのである。沼二の行動は母親を始め、家族の人々の眼でいつも油斷なく見張られてゐた。沼二がやたらに人眼につく所をうろつくことを、田窪

家の人々は嫌つてゐたからである。妹の麻矢を除けば、それらの眼は嚴しく、冷酷であつたが、沼二はそれを恐れてゐる樣子はなかつた。ただ嫌ひな人間に出くはさぬやうに、專念注意を集中してゐるやうに、見えた。沼二は田窪家の人々から精薄兒同樣に扱はれてゐた。消炭色のスウェータアの首のところと袖口とに白い襯衣が細く出てゐる。胴も足も長い沼二は、逼つた眉の下の大きな眼でぢつと人を見る、面長な青年だつた。凶暴なものがふとちらつくことのある彼の眼の底に、熱つぽい人懷つこさが隱れてゐるのを、由里は見付けてゐた。大抵手を洋袴の後に突つこんで歩いてゐる。動作がのろく、いつも無言で、ごく稀に吃りながら必要なことを言ふだけのこの青年は、この家では精薄兒扱ひをされてゐたが、由里は、精薄じみた青年を昔見たことがあつたが、それと比べてみると沼二はそれとは異つてゐた。飄々と漂ふやうに歩いてはゐるが、空洞な所はない。中に固い、なにかの充實があつて、後姿にも空洞がない。握手したことはないが、冷たく汗で濕つてゐさうな感じのある大きな掌や、スウェータアから突き出た長すぎる手首なぞには、幾らか普通でない感じはあつたが、由里はこの青年の眼を見てゐて、精薄兒といふ感じは受けなかつた。單なる變り者かも知れない。どうかすると狂人かも知れない。由里はさう想つた。

眼はいつも、熱のある人のやうである。柔かな髪の下の廣い額は引締つて固く、いつも滑らかに冷たい艶をおびて、ゐた。時々臺所口を下りて、どこともなく出て行くが、その他は思ひもかけぬ時に廊下や部屋々々を歩く他は、三疊の居間に籠つてゐた。由里(ユリア)が最初にこの青年を見た時、由里は眼を疑つた。客の聲がするので、由里が臺所口から出て裏を廻つて行くと、玄關へ曲る角の硝子戸が四寸程開いてゐて、そこにひどく背の高い若い男の姿が、その戸の隙間一杯に、細い羽子板のやうになつて立つてゐたからである。その男は鋭い眼でぢつと由里を見た。それが沼二だつたのだ。由里が出かけようとして門の方へ歩いて行くと、ふと通用門がガタンと内側へ開いて、やうやう潛(くぐ)るやうにして入つた彼が、長い體を延ばし、こつちへ來るやうな時、由里は明るい所で彼の顏を見た。彼の顏には智的なものがあるのが分り、ひどく出來のいい青年が、何かの詛(のろ)ひでこのやうな長い、不恰好な體の中に押し籠められてゐるのではないか、といふやうな不思議な感じを由里は受けとつた。由里の部屋にあるこの青年の父親の、彫りの深い、英吉利人のやうな顏立ちに似てゐることが、一層彼をそんな風に見せるのだつた。眼の中に凶暴なものがあることに眼を潰(つぶ)れば、沼二は一人の美青年だつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com